



赤澤  
常道  
著述

魂  
の  
入  
替

全

71  
3818





門 71  
號 2918  
卷

赤澤常道著

# 魂の入替

早稲田 大學 圖書館  
第31.1.16  
藏 書

東京書林

山中市兵衛發兌

## 玉の入替序

玉匣二荒山の麻糸の椽木の椽

子椽救しを魂合る昔は友の解

返りておおき玉蓋思ふ是こじ

志、魂りふけりて何靈魂の事か



魂の入替



さく吐く一後りぬ、さく 吐く 園子錢地玉此この  
 以高を尋るか、この 同しく、この 素より誰たれ  
 を名玉乃、この 花火は、この 田一き、この 燐火を  
 見まば、この 則魂と、この 又夢見を、この 一人を、この 毎  
 の先、この 以て、この 我こそ、この 其魂の、この 由来ゆらい

を、この 友と、この 説ん、この ごと、この 霊言、この 八百の、この 玉共  
 一、この 器、この 悖法、この 螺を、この 福神の、この 子、この 持つ  
 玉も、この 如意、この 宝珠、この 其の、この 出、この 次、この 身、この 平  
 次、この 身、この 玉、この 屋、この 一、この 中、この 子、この 飛、この 玉、この 大、この 玉  
 小玉の、この 吹、この 分、この 草、この 空、この 氣、この 一、この 不、この 思、この 一、この 種しゅ



種ふ色の又あると自然の理處  
も空と吹くぬが理目玉を見ても  
くよくく以て魂きよらの魂の入替を

明治七と歩身女月山人白らるる

文中ムもコザルとよむべし

赤澤常魂の入替道著述

カテ世の中も追々文明開化は相成國中一學校  
を御取建し成り六歳以上の子供は入校して内  
外の事を學び如何成邊鄙でも無學文育のもの  
無いやうにあらざると云ひ誠はありこうの事  
ムるが其子供も追々開化は赴きまゝやうが從  
來無學の親々も實は頑固にて困りまゝとりの  
て學校へ子供を遣るを御用で人足まで使役

魂の入替



ろ、やうに思ひ、種々苦情おどを唱へ心得違ひ  
 ぶ者もムるさうで、却て子供に議論されて、毎度  
 困却の事が在りますと、此間某書肆へ参り買  
 物を致して居り、年五十半りの男、本肆  
 へ来り、ヘンゴタンを賣てらると申せ、店  
 丁が、ソレハ、小西と云此先の藥室よ、ぶります、  
 申したら、ナニ、藥屋でも學校の書籍を賣るかと、  
 既立出んと為る時、流石主人も主人をけで、  
 貴丈の御尋為るも、若哉單語篇でハムりませぬ

書店にて  
 本を求む  
 圖



鬼の八景



のと云と成程其單語篇で在つことと求めて歸り  
 ましと其跡でどうして主人へコンタンを  
 單語篇と御悟為さきこと聞と所が、い、様で  
 ござさき、従来の書名とい、當今の表題も違ひま  
 した故單語篇を顛倒小覺えて来さるので、夫を店  
 丁も返魂丹と聞誤り、藥室は有ると教へましと  
 ものてムささきと、果も大笑の事でありましと  
 の、都てあんふ事が、世間にも間々ある事で、  
 まま、ヤ、トキニ、返魂丹と云事で發念ましと、  
 子、供

も學問は精を出し、ま、ん、ら、追々開化も赴き  
 まし、やうが、今のコンタンの連中も、兎角舊  
 臭は深附毎事談話上にも私見を加へ、夫を子供  
 は迄も咄して聞かせ、故余程開化進歩の妨げ  
 を為さ事でも、彼返魂丹又も返魂香もど、  
 申物も字義の上で、魂を返すといふ意故、名實  
 正なる物あら、従来の舊弊魂を返却し、開化魂を  
 入替る、道具も為りまし、い、夫とも外は妙  
 工夫が在まし、やう、  
 或、  
 御尤の御存知付てム



只今の御咄の返魂香や返魂丹も、とても無益  
な事でも、近來西洋の學術盛んに行き、蒸  
氣の舟車、テレグラフ、家建の趣向、金銀銅鐵の細  
工、醫術も、勿論衣類食物の事迄、百般の美事、悉皆  
之を彼は取る、實は開化日新の秋にて、恐らくは  
歐羅巴洲の開化も劣らば、東洋中にも皇國を  
以て開化第一と為せよ、加之皇國も神代より  
固有の神髓と云道のムつて、是又外國は比類無  
き尊き道で、此人間上の事を、今上皇帝の勅慮を



以て、万民保護の御政を施し給ひ、幽界の事を、出  
雲の大社に鎮り坐せ、大國主の大神主宰、實は  
顕幽二界の保護はとむ、人々正直誠實の心あま  
し、其幸福を下し給ふも亦速くある事、難有事  
でも、只今御咄の魂の入替の事は、つき、奇代  
ふ説を申し、先生が、其先生も自ら開  
化道人と号し、何所の御仁も存し、其大槩を御  
或講席で、御講義を拜聴し、其大槩を御  
咄し、告し、ま、先人間万事正邪善惡心の赴



くも随て、事業みお其域を異も、乍去、素人間の  
 魂と云とのも、神明の御授け下さるものよて、此  
 魂の事も、未も委詳辨しませぬ、此魂と云物、乃ち  
 一身の主宰にて、心と膽も、四肢も、耳目口鼻も、皆  
 魂の司令を受るものゆゑ、神道も、先鎮魂祭  
 を初として、其魂を和め、清浄潔白正直の魂に致  
 志、諸の祝詞を告して、神に祈り幸福を願ふ事  
 て、先我魂を鎮め、不動様を致せば、素より神の附  
 與あされし、清浄潔白の魂ある故に、百般の學事

又、世間活物の究理止は於て、正邪善惡の見分  
 け、明瞭に相成り、赴くところ悉皆善美を盡し、物  
 は凝滞無くして、自然開化の域に至るものゆゑ、  
 る、縦令いふ様學問して、魂の茫然して、決し  
 て目的不定、終身無益の事、盡力して、一事有益  
 の業を果せ、事終む、此上も無き遺憾の事、  
 くらぬ、夫故に、此魂の動る様、毎朝自分  
 の鎮魂祭を為るより、外の手段もあらず、先神に向  
 ひて、告ぐべき、祝詞も、拭卷母畏仗、天御中、主尊



神産靈尊高産靈尊ノ大前ニ畏美々々白ス事ノ  
由ハ吾身ニ附與賜レ御魂五月蠅為ス世上ノ醜  
態又ハ牽強附會説ニ迷ヒ易ク何ノ道ガ善何ノ  
態カ正執ル可ク捨ツ可クノ見別ニ疎ク斯ク在  
リテハ上ハ君ト親ニ事ヘ下ハ吾身ヲ立ル事ノ  
目的ヲ失ヒ終身一ノ善事ヲ為ス事ヲ得ズ人ト  
生ル甲斐無キノナラズ廣キ厚キ大御神ノ  
御慮ニモ違ヒ其罪咎ノ贖フ時無ク泣キ事ノ限  
ナレバ憐レ三柱ノ大御神高天原ニ小罗鹿ハ

御耳振立テ乞祈事ヲ甘ラニ聞食ヒテ此魂ノ  
邪説ニ觸ル時ハ動ク事無ク善事ニ觸ル時ハ一  
向ニ入レ収メ毎事其見分ノ明ナル事鏡ニ物ノ  
寫ル如ク善事ニ赴ク事ハ水ノ低キニ至ル如ク  
幸へ賜へト畏美々々白ス斯クノ如ク毎朝神子  
告シ其神子告キ言を忘ル事亦多ク自然  
と心も爽然と成り第一神經静りて物ヲ觸ル  
も軽々敷動ラズ善と惡との見分定り何事を為  
しても速ニ成功せんとのでムる又一説ハ魂



と云物を神の附與一賜へるの素より當然こと  
よて、眼は見え、口は味ひ、耳は聞き、四肢の働き、心は  
魂の司令せり。所よて、實は一身の主宰、尊き物の  
極度よて、其在る所を、脳髓とて、頭蓋の中は太切  
の物在りて、其中は宿り在るあり、去るも、脳髓の  
多きもの、伶俐、少きもの、痴愚なるものよて、  
獸の中よても、猿は頭大きく、人の形は似たり、夫  
故は智も外の獸より多く、馬や兎も頭少く、脳髓  
不足ある故、智も乏しと、此説理あるは似たること

も、天窓が大ききより、智恵のあるといふ義も  
何れも、福助の天窓を極めて、濶大なるも、故  
群敏捷といふ事も、されば也、尤智も何ほど  
あつても、無益の智あるも無きも均し、今茲に一  
男子あり、少年時よて寒暑を不厭、螢雪の窓は書  
を讀み、詩文詠歌、何一つ出来ぬと云業を、  
ど、心の目的確乎たる所を得ざれば、只々議論高  
尚よのち走り、一つの善事を成したる事なく、又  
も山水の風致を愛し、詩文詠歌は心を勞し、おど



何の益もあまのみあらば、却て人の耳目を迷さ  
し、よろしうらぬ事でも、今爰一人有り、此人  
の只司令なる人の命を奉て、車を曳き、又土を  
荷ひ、至て智ふきその様あれども、世間は益を  
も事ハ、前の大先生よき、却て多く、あまの已  
分を守りて、私見を加へざればあり、此人も少  
でも有益智り、前の先生も多くても無益の智  
あり、是も魂の司令を受る所、只正邪はあまのみ  
昔より魂の事も種々を説もムる故、こまもよく

見分秘はありませぬ、だが一通りおあり申せ  
ど、只靈妙不思議なるものにて、先此人体と云  
は、最初父母の妙合にて、此体の芽を生し、神の  
附與より魂めよりつき、天地運轉の時季より  
て胎を出で、父母の養育にて体を伸べ、師の教へ  
小よりて道を學び、己が心の活動にて立身出世  
も、事にて、出胎の後、魂の司令を受け、  
動く也、其魂たるあらざれば、事業も亦従つ  
て正しきを得ず、即今の子供も、世間も追々開化



の人多くあり、又ち學校の設けもあはば、自然と  
 魂の赴き方も、正しき道に至りましやう、是迄  
 は人の魂を中々容易はとり直しの付く事では  
 むるまい、夫故は人智人術の及らざる所を、神様  
 は御願ひ申をより外らむりませぬ、サテ永々と、魂  
 の由来の聞學咄し、サゾ御睡氣を催しませやう、  
 睡氣醒しよ今一席、私の杜撰のおとこかゝを申ま  
 せやう、只今も申通り子供も兎もはらと、中年以上  
 の人の魂を、所詮入替おけせば、従前の迷ひらと

凡そ成  
 孕成  
 母ノ  
 始ノ  
 血終  
 卵ノ  
 外膜  
 絡終  
 胞終  
 成シ  
 其申  
 動靜  
 二別  
 支別  
 卵

是きせぬる其入替る所を、以らる所の所が、  
 ろらんと、種々思案致して見まは、之を臍  
 入替るは、あうんと、粗決定致し、先人間の  
 体中、毛髪を始め、四肢耳目鼻口、何れも一瞬間  
 も動き働かぬ所なく、實は繁忙きものふる、獨  
 り臍のみ体中の本府は安座して、局外中立の氣  
 象あり、尤あはの臍と云物も、胎中在つては、頗る  
 盡力せしものにて、頭書に在る通り、のりけや  
 其功績より、出胎の後、安閑無事にて







同ジク 經往事  
ヲイニ 下體  
ノ下體 中ニ空  
シノ年 ン經ソ  
レバコ 名ヲ  
得ル  
ナル  
シト云

魂の入替

書紀曰于時神光照海忽  
然有浮來者云々是時大  
已貴神問曰然則汝是誰  
耶對曰吾是汝之幸魂奇  
魂也大已貴神曰唯然迺  
知汝是吾之幸魂奇魂今  
欲何處住耶云々



大國主神  
和魂と問  
答の圖



魂の入替

十一



の鳴る時も、用心して臍を隠せおと皆うれ、由緒  
のけりる事にて疎はかりひ給ふお、お、其内子  
も、大笑をさるる、臍がよまら、冷笑をさば、お臍が  
茶を涌まおどい、其経絡の通むる意を表して、題  
をさるるものにて、深理ある事にもあら、又此程、本  
教大基と云書物を見しは、吾皇國を地球上の腦  
髓にて、實は神明の府、靈魂の宿所をさば、此上も  
無き尊き國なる事、故事はより、又西洋の諸説  
を参考あそきて、委詳に説あり、誠は愛度書物

みてきとあをけりる、と覺えたり、今云とあらぬ、  
臍の論を、地球上をさば、歐羅巴洲の地位はあそ  
より、其臍の地の歐羅巴洲を、早く靈門より開化  
魂の入替り、今日開化の事を説くもの、歐羅巴洲  
の上は非なるお、其開化魂を宿する腦髓を、吾  
皇國をさば、臍よりおのきく、後る、とのくども、  
終は、其司令の主宰、在り所をさると、何ぞ外國の  
開化として、怒る、不足らんや、さまたども、孤陋管見  
にて、江湖を切々の物と見て、吾國丰り國だとお



ろふ頑物よ、此臍の論を解難うるべし、前も  
 申を通り、吾國を造物主の別て御恩頼幸一賜ふ  
 事おとば、天子様を、現人神とあらば、幽界の事  
 も、大國主の神の御擔ひもあを、祈れば甲斐  
 己守を益り、何れもかでも御上の司令は從  
 ぶが、生れた魂の司令は從つて、四肢耳目鼻口の働  
 く小同ト事おとを、能其分を守りて、政令は從ひ  
 今日御世話おとる、所も、お各々の魂の入替  
 の御世話と心得るが宜しいと、人の欠を為るよ

も不要臍と魂との混雜、口を嚙の速玉男、  
 魂消た虚を月夜見の、闇は錢炮的も無き、玉の出  
 入るホドとやら、後口不合牽強附會、嗚呼此人の  
 口をして、臍の如く、沈黙も、よろし、うらんと、人

魂の入替 畢

魂の入替



訓蒙國史畧	全四冊	米國史畧	二冊
世界不思儀	一冊	會話讀本	二冊
小學假字格	一冊	漢語文章	二冊
究理便解	六冊	同書帖在自	二冊
母の導き	二冊	西洋言行錄	二冊
新撰字解	一冊	日本外史字引	二冊
萬國地理啓蒙	追々出	布告類編	追々出

# 官許

日本橋通一丁目

北畠茂兵衛

同二丁目

稲田佐兵衛

芝三島町

山中市兵衛



